

こんにちは。
町長です。



地域資源を活用した起業について

今、小鹿野町では、新しいビジネスの立ち上げに挑戦している人がいます。その人は、地域おこし協力隊として町に移住した工藤エレナさんと、ご主人宏樹さんのお二人です。

エレナさんはロシア生まれで小さいときに父親の仕事の関係で福島県会津地方に移り、それ以降は日本に住まれ東京でIT関係の仕事などをされていました。その後、ご主人と結婚され小鹿野町の地域おこし協力隊員に応募し、移住されました。町の協力隊員としては、町の魅力発信事業や移住関係の仕事に取り組む傍ら、小鹿野町で採れるはちみつや、倉尾地区にある毘沙門水を利用して「はちみつ酒(ミード)」醸造事業に取り組んでいます。

「ミード」というのはちみつが原料の醸造酒は、ビールやワインに並んで世界最古といわれており、ハネムーン(honeymoon)の語源ともなっている縁起の良いお酒であるとのこと。日本ではまだあまりなじみがないお酒ですが、これから新しい需要が開拓できるものとして期待されています。今、試作を会津若松にある日本酒醸造所をお願いして行っているとのこと。私も試作品を試飲させていただきましたが、口当たりが良く女性に好かれるお酒かなと思っております。はちみつ酒専門の醸造所は日本では、まだ数少ないとお聞きしておりますが、町で利用していない旧倉尾中学校体育館の下部

(駐車場部分)をお貸して、現在醸造所建設に取り掛かっていただいております。

小鹿野町にある資源を活用して新しい商品を開発する素晴らしい取り組みであります。また、お二人のすごいところはマーケティング戦略をしっかりと立て、需要開拓や販売ルートなどの計画を樹立されているところ。町としてもこのような新しい試みをしっかりサポートしてまいりたいと存じます。

コロナ禍の時代で、東京一極集中から分散型国土形成、地方の活性化がより一層叫ばれており、若者や都市住民の地方回帰の流れや、テレワークやワーケーションなどの働き方改革が定着してきております。

そのような中で、若い人の地方への回帰で一番問題となるのは、働く場の確保ではないかと思いますが、エレナさんご夫妻のように起業して働く場を自ら作る人も増えてくると思います。特に、今の時代は家に居ながら仕事ができる時代になってきておりますので、住む場所等がうまく確保できれば移住もしやすくなると存じます。それには、空き家バンクの活用や宅地の確保なども重要な課題となってきます。そして何より大切なのは町に住む人にとって安心して住みよいかどうかという点であると考えます。

町としても総合振興計画に掲げる「文化の香り高く将来に躍動するまち」の将来像の実現に向け、引き続き一層努力してまいりたいと存じます。

小鹿野町長 森 真太郎